## Vol.120　金髪の少女達 ～会社も地域も人作りから～（平成19年9月25日）

友人の一人に裏千家の宗匠の千宗室「玄室」がいます。

先日鹿児島の友人達にゴルフに招かれ、朝仲間達と城山ホテルの食堂で朝食をとっているところへ千宗室さんが何人かの供をつれて入って来るなり私に「やぁ秋元さん久しぶり。おはよう・・・」と声をかけてくれた途端、食堂にいた人達100名余りの人が一斉に立ち上がって「おはようございます」と挨拶をされました。

私の友人達は大変びっくりして「秋元さん！あんたこんなに偉い人なの？？」と言うので、「俺じゃない！千さんへ挨拶したんだ」と食堂を出る時、立て看板を見ると「九州、沖縄淡水会」と書いてありました。

食堂の人達は皆千さんのお弟子さんたちでした。

その千宗室さんが「秋元さん、私のところへは毎年小さなお弟子さん達がたくさん入って来られます。この小さいお弟子さん達は、お祖父さん、お祖母さんと一緒に育った子は一目で分かります。立居振舞い、所作、言葉使いが全く違うからです」と言われました。

昔は日本の家庭づくり、子育ては「父が叱り、母がなだめ、祖父母が諭す」と言う仕組みがあって子供たちは健全に育てられたのでしたが、今はその家族造りの仕組みが崩壊してしまいました。

私の会社ではもう10数年前から夏休みになると近くの学校から研修に子供達がやってきます。

概ね進学しないことか夏休みに非行化しないようにとの学校の配慮からであります。

或る年、金髪に染めた身体の大きな眼付の鋭い女の子が2人入ってきました。

担当の社員が私のところへ来て「あの子達は学校で不良の番長とその仲間だそうです。どうしたらいいですか？」と少し困った様子でした。

私は「今までと同じでいいよ。いい事をしたら大勢の前で褒めてやって下さい。失敗したら陰へそっと呼んで教えてあげて下さいね」と言いました。

それから数日後その社員がまた私のところへやってきました。

「あの子達は凄い！一を教えると十の仕事をテキパキとこなして、うちの下手な社員よりまったく良く働きます」と嬉しそうに帰りました。

夏休みの1か月はあっという間に過ぎて、2人の子は私のところへ挨拶に来てくれました。

「おじさん、明日から学校ですので今日で終わりです。お世話になりました。ありがとうございました。おじさん！来年はもっとたくさん仲間を連れてきてもいいですか？」と聞かれて私は言葉に詰まりました。

なぜか胸が熱くなり、涙がこぼれそうになったからでした。

私は声も出せずただウン、ウンと肯くだけでした。

分け隔てなく大人達と一緒にこき使われた夏休み、汗まみれで走り回った爽快感が彼女たちを変えてしまったのでしょうか。

その秋、彼女は私の妻に「このままだとまた駄目になってしまいそうですから、母の実家青森へ転校してやり直します」と言う彼女に「あちらは寒いから・・・」と妻が贈ったコートをふりちぎりながら電車に乗って行きました。

今彼女は青山学院大学を卒えて婦人服のバイヤーとなりイタリヤで活躍中です。